

＜北海道熊研究会 会報＞ 第72号 2017年 6月 30日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～71号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜第6報＞

ルシャ川・テッパンベツ川 両河口域での 3カ年間(2013年、2014年、2015年)の熊  
U.arctos に関する調査報告 門崎 允昭・稗田 一俊・PETER NICHOLS

＜調査時期⑥＞

2015年6月12日～15日 鱒鮭の河川遡上無し。

- ① (母子)テッパンベツ川左岸の草地で、4.5ヶ月令(体形で判断)2頭連れた母子が、草を食み、石を起こし、蟻を捕食していた。
- ② (母子)ルシャ川西の海岸沿いの草地で川左岸の草地で、4.5ヶ月令(体形で判断)2頭連れた母子が、草を食み、石を起こし、蟻を捕食していた。母の首に発信器装着されていた。
- ③ (母子)ポンベツ沢西の海岸寄りの草地で、1歳 4.5ヶ月令(体形で判断)2頭連れた母子が、草を食み、石を起こし、蟻を捕食していた。
- ④ (若熊)海岸伝いに徘徊しながら、1歳 4.5ヶ月令(体形で判断)1頭が海浜で、石を起こして、下に居るヨコエビ(身体を横にして泳ぐので横エビと言う)を捕食していた。身体が痩せ気味であった。母から自立して、索餌に経験不足で餌が充分に取れない為と推察された。
- ⑤ (成獣)♀1頭が(外性器露出で判断)、ポンベツ川沿いに徘徊していた。

＜調査時期⑦＞

2015年10月24日～27日 鱒鮭の河川遡上無し。但し、ルシャ河口部で、鮭1尾捕獲し食する熊(下記④の母獣)を1頭のみ1回目撃した。

- ① 体毛全身真黒な3歳9ヶ月令と推察される雄、ポンベツ沢道路出会付近で見る。
  - ② 首に発信器付けた9ヶ月令の子1頭連れた母子、海岸沿いに移動し、索餌していた。
  - ③ 頸部に一巡する白毛ある4～5歳の単独、草地で、石を起こし、蟻を捕食していた。
  - ④、⑤ 9ヶ月令の子1頭連れた母子2組が、石を起こし、蟻を捕食し、海浜で、石を起こして、下に居るヨコエビを捕食していた。
  - ⑥ 9ヶ月令の子にしては、通常よりも体形が非常に小さい(あたかも、6ヶ月令程)とも見える子1頭を連れた母子が、ルシャ川河口部の漁場専用道路から左岸沿いに岸辺を、上流に走り行くのを目撃した。大瀬初三郎氏が言う、交尾期が遅く。遅く生まれた子の可能性も否定し得ない事象に見えた。なお、同様の知見は、ブロムレイも極東の熊で述べている(南部シベリアの熊と月輪熊、1972年、和訳本)。今後、検証すべき事象である。
- 10月25日曇、外気温15℃、ルシャ川河口部の川水の水温は8℃であった。

＜3ヶ年間の確認個体の総括＞

3ヶ年間に確認した熊の内訳は、以下の通りである。

個体識別した根拠も記載する。下記の表記、例えば、④の②とは、調査時期④番の②の、

熊を示したものである。

<1> 0歳1子を伴った母 ④の②、④の③、⑤の③。個体識別した結果、④の②と⑤の③はテレメを着けており同一母子であった故、重複出現を除くと2組と言う事で、母子の合計頭数は4頭であった。

<2> 0歳2子を伴った母 ②の②、③の⑤、④の①、⑤の①、⑤の②、⑤の④、⑥の①、⑥の②。個体識別した結果、④の①と⑤の①の2子は頻繁にじゃれ合う事から、同一母子であり、これを同一母子とし、重複出現を除くと7組で、母子の合計頭数は21頭と言う事である。

<3> 満1歳代1子を伴った母： 0であった。

<4> 満1歳代2子を伴った母： ①の④、①の⑤、③の④、⑥の③ 重複は無く、4組で、母子の合計頭数は12頭であった。

<5> 若熊：満1歳代1頭の出現： ①の③、③の②、⑥の④ 重複は無く、合計3頭であった。

<6> 満2歳代1頭の出現 ①の②、②の③、③の① 重複は無く、3頭であった。

<7> 満3歳以上の単独熊の出現 ①の①、①の⑥、②の①4頭、②の④、②の⑤、③の③、④の④、④の⑤、④の⑥、⑤の⑤、⑥の⑤ 複数年度に亘れば重複の可能性はあるが、同一年度では、個体識別し、重複を避けた数値で、合計14頭であった。

<8> 以上の結果から、3ヶ年間に当該地で確認した熊は母子13組総頭数37頭であった。また単独個体の総頭数は20頭であった。両者合わせた総頭数は57頭であった。

#### <出現個体の特記事項>

① <1>～<6>は、いずれも一回当たりの出現時間が30分以上にわたる出現で、索餌と採餌であった。

② <7>の、②の①は4頭の出現で、ゴマツザラシ *P. largha* の死体を食べるためであった。他の<7>は短時間の索餌採餌であった。

③ 母熊が連れていた子の数について言えば、1子の場合が2組、2子の場合が11組で、2子の場合が、1子の5.5倍と高率であった。よって、当該地では子の数が2子の場合が、明らかに多いと言える。

④ 当該地では、子が満1歳過ぎた5月から8月の間に子を自立させていた。鮭鱒を食べていない地域の場合、母が連れてくる子が2子の場合、子が満2歳を過ぎた5月から8月の間に子を自立させるのが通例であり、当該地は鮭鱒を補食し得る事で、子育てに適した場所と言える。

⑤ 単独個体は、当該年に母から自立したもの3頭(満1歳代)、前年母から自立したもの3頭(満2歳代)、他に単独熊14頭を確認したが、これらの個体は鮭鱒その他海豹の死体を食べに来たものであった。

⑥ 当該地を長時間利用していたのは母子<1>～<4>の合計13組と<5>と<6>の若熊3頭と前年母から自立した満2歳代3頭であった。このことから、当該地は母子の子育てと子に生きる術を教える場として使用されている事と、母から自立した個体が、しばしの安住の地として、索餌採餌の場として利用していることが看取された。3歳以上の単独個体の累計は20頭であったが、いずれも索餌採餌、とりわけ鮭鱒目的に来たものだが、母子が採餌している場合は、それを了解し、邪魔しないよう行動している様子が、明らかに観取れた。熊社会の暗黙の秩序の存在が看取された。(丁)